情報の縄張りから見た対話の構造

——聞き手の相づちを中心に——

中　園　篤　典

0．序

本稿は相づちの使用における規則性を神尾（1990）の「情報の縄張り理論」の枠組みで考察し、聞き手による相づちの使用を一貫した規則で説明したいと思う。本稿の骨子は話し手により提示された情報が聞き手にとって〈近〉の情報であるか〈遠〉の情報であるかによって、相づちの種類、位置に対比が生じるという点にある。3、4節では実際の対話資料（注）の分析からこの仮説を実証的に証明したいと思う。また5節ではこの「情報の縄張り」が話し手の発話速度にも影響を与えるという点を指摘したい。結論として、対話の参加者は暗黙のうちに「情報の縄張り」に配慮した言語行動をとることにより「理想的な対話の型」を形成しており、そこからの逸脱は語用論的な意味を伴うというペナルティが課せられるという点まで言及したい。

1．分析方法と問題点

本稿ではテレビの対談番組から録音、文字化したものを資料として使用し、その中における相づちの現れ方を調査した。自然な対話における話し言葉を分析すると、話し手の発話は「発話＋ポーズ」の連続から成り立っており、こうした発話節の中に聞き手による相づちが挿入されている。(1)〜(4)はその例である。地の文が発話節、[]の中は相づち、() の中は出典を示す。

(1)　私は絶対に東京で仕事をしたいとは思わないんです。[ほう]　(EX)

(2)　（新興宗教なんてものは）最初はむしろ弾圧を受けるのが普通で法難なんて言い方しますよね。　[はい]　(NEWS)

(3)　えーっと『嵐を呼ぶ男』ですか最初は。　[そうですね]　(徹子)

(4)　（あそこにいる助手さんなんかわりとビール瓶でガーンと殴られるとか）そういう事あると思うけど。　[はーん]　(対論)

(1)は建築家の安藤忠夫がタレントの上岡龍太郎に仕事に対する自分の信条を話している。(2)はTVキャスターの筑紫哲也が宗教学者の中沢新一に新興宗教の動向について話している。(3)はタレントの黒柳徹子が手元の資料を見ながら俳優の高品格に彼の初出演について話している。(4)は評論家の田原総一郎がスタジオの撮影助手を例にあげながら経営コンサルタントの谷口正和にマゾヒズムついて話している。

文字化した資料は、「日本語音声」による東大音声研開発の音声録聞見を使用し、発話時間、ポーズ時間、相づちの位置などをはかった。杉藤（1987）の形式にしたがって例文(1)〜(4)における発話節と相づちの位置関係を棒グラフ化すると図１のようになる。０の位置から左へ発話の長さ、右へはポーズの長さを示しており、聞き手の相づちがどこに入るかは棒グラフに重なる斜線部分で示してある。

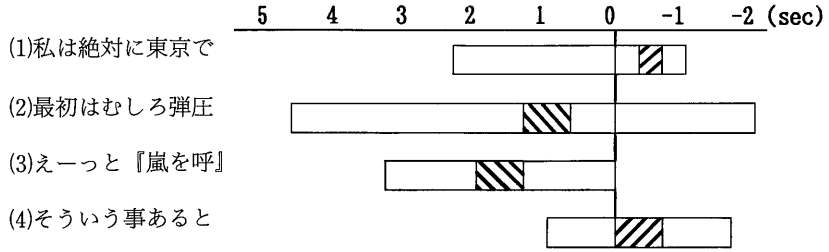

図１　発話節と相づちの位置関係

一見すると聞き手の相づちは種類、位置ともに任意に挿入されているように見える。しかしよく観察すると(2)(3)と(1)(4)に対比を見いだすことが可能である。たとえば相づちの種類に注目すると、(2)(3)においては「はい・いいえ系」の諾否表現が用いられているが、(1)(4)では「へえ・ほう系」の感嘆表現が用いられている。また相づちの位置に注目すると、ここでも(2)(3)においては話し手の発話に重なる形ではじまっているが、(1)(4)では話し手のポーズ部にずれ込む形で始まっている。この対比はどのような原理によって生じるのかが本稿のテーマである。

従来この分野はいわゆる実験言語学的な方法で研究されてきたため、相づちの規則性に関して理論言語学がめざすような原理の研究は行われてこなかった。以下では、相づちの規則性を最新の語用論の成果の１つである神尾（1990）の「情報の縄張り理論」の枠組みで考察し、上に見られる相づちの使用を一貫した規則で説明したいと思う。

２．情報の縄張りと相づち

神尾（1990）によると、情報は対話の参加者のそれに対する関与の強さによって表１のように４つに分類される。

表１　情報のなわ張り（神尾1990より抜粋）

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手の	外	A	D
なわ張り	内	B	C

A情報は「話し手占有情報」であり、話し手が自分の誕生日や出身地などについて話すときがこれにあたる。B情報は「話し手・聞き手共有情報」であり、話し手が今日の天気など話すときがこれにあたる。C情報は「聞き手占有情報」であり、話し手が聞き手の心理状態などを話すときがこれにあたる。D情報は「話し手・聞き手非共有情報」であり、話し手と聞き手がお互いに不確かな話題（今日の南極の天気など）を話すときがこれにあたる。「情報の縄張り理論」では聞き手にとって〈近〉の情報は「聞き手情報」と呼ばれ、表1ではB、C情報がこれにあたる。一方、聞き手にとって〈遠〉の情報は「非聞き手情報」と呼ばれ、表1ではA、D情報がこれにあたる。

この「情報の縄張り」は言語形式に反映される。神尾（1990）によれば、命題として「聞き手情報」をもつ文は「ね形」をとるとされ、文末助詞「ね」「なあ」などが必須であるとされている。1節の(1)〜(4)で「聞き手情報」と認められるものは次の2文である。

(2)　（新興宗教なんてものは）最初むしろ弾圧を受けるのが普通で法難なんて言い方しますよね。　（NEWS）

(3)　えーっと『嵐を呼ぶ男』ですか最初は　（徹子）

一方、命題として「非聞き手情報」をもつ文は文末助詞が任意となる。1節の(1)〜(4)で「非聞き手情報」と認められるものは次の2文である。

(1)私は絶対に東京で仕事をしたいとは思わないんです。　（EX）

(4)　（あそこにいる助手さんなんか割りとビール瓶でガーンと殴られるとか）そういう事あると思うけど。　（対論）

神尾（1990）の「情報の縄張り理論」では、話し手がある命題を表現する際の文末表現を主な研究対象としているが、「情報の縄張り」という概念は相づち研究にも多くの示唆を与える。私は話し手により提示された情報が聞き手にとって〈近〉の情報であるか〈遠〉の情報であるかによって、聞き手の発する相づちの種類、位置に対比が生じると考える。すなわち、「聞き手情報」という観点から例文(1)〜(4)における相づちの現れ方を分析すると、一見任意挿入されているかに見える相づちが一定の規則によって律せられている可能性を仮定できる。

もし話し手により提示された命題が「聞き手情報（B、C）」、すなわち聞き手にとって近い情報であったなら、聞き手はそれに対し「はい・いいえ系」の諾否表現で応ずるであろう。また自分に近い情報に対して聞き手は素早く反応するであろうから、相づちの位置も相手の発話に重なるような形で現れることが多いと予想できる。(2)と(3)で諾否表現の相づちが用いられ、その位置も話し手の発話に重なる形で始まっているのはその典型であるといえる。

一方、もし話し手が提示した命題が「非聞き手情報（A、D）」、すなわち聞き手にとって遠い情報であったなら、聞き手はそれに対し「へえ・ほう系」の感嘆表現で応ずるのが自然であろう。また自分に遠い情報に対して聞き手は遅く反応するであろうから、相づちの位置もポーズ部分にずれ込むことが多いと予想できる。(1)と(4)で感嘆表現の相づちが用いられており、位置も話し手のポーズ部にずれ込む形で始まっているのはその典

型であるといえる。

本節で私は「情報の縄張り」という認知論的な観点が聞き手の言語行動を分析する際に必要であることを述べた。私の仮説は、提示された情報が「聞き手情報」であるか否かによって相づちの位置、種類に対比が生じることを予測する。次節ではこの予測が実際の発話資料にどの程度反映されているか検証したい。

3．情報の縄張りと相づちの種類

ここでは「情報の縄張り」と相づちの種類との相関関係を検証したいと思う。

一般に相づちに類すると目される聞き手の言語行動は多種多様である。聞き手の言語行動のどこまでを相づちと見なすかは難しい問題であるが、本稿では「音声録聞見」で音声波形として表れているものに限ることにした。またうなずき、視線等の非言語行動も対話の分析には欠かせないが、本稿では録音資料に限っているので、そうした非言語行動は除外した。本稿では相づちを次の９つに分類した。

①無音（反応無し）　②諾否表現　③感嘆表現　④笑い

⑤質問（問い返し）　⑥繰り返し　⑦先取り　⑧言いさし　⑨話者転換

さて、私の仮説は相づちの種類に関して次の結果を予測する。話し手により提示された命題が「聞き手情報（B、C）」であった場合、聞き手はその情報に②諾否⑦先取り⑧言いさしで応じるであろう。なぜならその情報は聞き手にとって〈近〉の情報だからである。次の例はその典型である。先頭の数字は相づちの種類を示す。

(5)聞き手情報（B、C）

②あなたとは前に別の番組で御一緒したんですけども。　［はい］　（対論）

⑦案外今日朝のワイドショーなんか見てますと公平にね。　［やっていた］（EX2）

⑧（新興宗教なんてものは）最初むしろ弾圧をうけるのが普通で法難なんて言い方しますよね。　［ありますね］　（NEWS）

したがってもしこのとき、聞き手が相づちとして③感嘆⑤質問⑥繰り返しを用いたら自分の領域にある情報をあえて遠ざけるような印象を相手に与えるため、極めて不自然になるか、別の語用論的な意味が生じると思われる。

(6)③？　あなたとは前に別の番組で御一緒したんですけども。　［へえー］

一方、話し手により提示された命題が「非聞き手情報（A、D）」であった場合、聞き手はその情報に③感嘆⑤質問⑥繰り返しで応じるであろう。なぜならその情報は聞き手にとって〈遠〉の情報だからである。次の例はその典型である。先頭の数字は相づちの種類を示す。

(7)非聞き手情報（A、D）

③僕は絶対に東京で仕事したいとは思わないんです。　［ほう］　（EX）

⑤しかし台風なると思い出すなあ。　［何を？］　（パペポ）

⑥だからね僕は大阪に帰って来るとホッとする。　［あっホッとする］　（EX）

したがってもしこのとき、聞き手が相づちとして②諾否⑦先取り⑧言いさしを用いた

ら、自分の領域にない情報に干渉するような印象を相手に与えるため、極めて不自然にのなるか、別の語用論的な意味が生じると思われる。

⑻②？　僕は絶対に東京で仕事をしたいとは思わないんです。　［いいえ］

なお①無音④笑い⑨話者転換は、話し手の声の調子や身ぶり、常識、場面、文脈などに左右されやすいため、「聞き手情報」か否かに関わりなく平均して現れるであろう。以上の予想をまとめると図２のようになる。

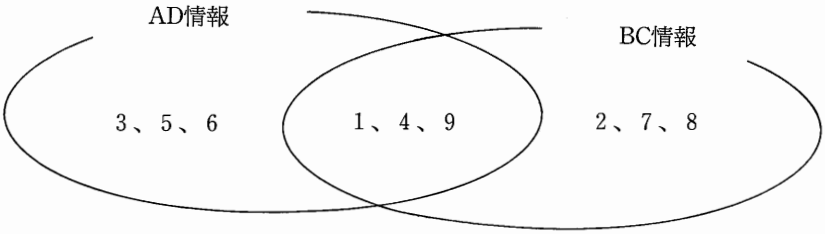

図２　情報の縄張りと相づちの種類（予想図）

以上の予想が私の資料に網羅的に反映されているかどうかであるが、発話を「情報の縄張り」A、B、C、Dに分類し、各々に含まれている相づちを種類ごとに集計すると表２のようになる。

表２　情報の縄張りと相づちの種類

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	Total
B	1(2%)	21(56%)	0(0%)	3(8%)	0(0%)	4(10%)	3(8%)	3(8%)	2(5%)	37(100%)
C	1(3%)	16(59%)	0(0%)	1(3%)	0(0%)	1(3%)	3(11%)	1(3%)	4(14%)	27(100%)
A	11(21%)	8(15%)	15(28%)	5(9%)	4(7%)	3(5%)	0(0%)	0(0%)	6(11%)	52(100%)
D	4(28%)	5(35%)	2(14%)	0(0%)	0(0%)	1(7%)	0(0%)	1(7%)	1(7%)	14 (100%)

「聞き手情報（B、C）」に②諾否⑦先取り⑧言い差しの現れる比率が高く、一方「非聞き手情報（A、D）」に③感嘆⑤質問が現れる比率が高いことが分かる。なお⑥繰り返しは「聞き手情報」か否かに関わりなく平均して現れている。個々の細かい分析は今後の検討課題であるが、少なくとも上の調査結果から相づちの種類が「情報の縄張り」によって統率されていることが確認できるように思う。

４．情報の縄張りと相づちの位置

ここでは「情報の縄張り」と相づちの位置との相関関係を検証したいと思う。相づちは位置的に話し手の発話部から始まる場合（Ａ１）とポーズ部に入ってから始まる場合（Ａ２）の２通り考えられる。図示すると図３のようになる。

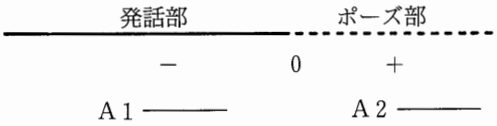

図 3　相づちの位置

本稿では発話部とポーズ部の境を 0 として、前方のA 1 を－位置、後方のA 2 を＋位置とする。したがって、たとえば「相づちの位置が－0.82である」とは、相づちが 0 から発話部の方向に0.82秒の位置から始まっていることを意味する。また「相づちの位置が＋0.15である」とは、相づちが 0 からポーズ部の方向に0.15秒の位置から始まっていることを意味する。

私の仮説は相づちの位置に関して次の結果を予測する。提示された命題が「聞き手情報(B、C)」であった場合、その情報は聞き手にとって〈近〉の情報であるから、聞き手の相づちは－位置から始まるのが自然であろう。特にC情報は、話し手が聞き手の占有している情報を話す場合であるから、聞き手は相手への配慮から位置的にかなり早い時点で相づちをうつと予想できる。つぎの例はその典型である。先頭のアルファベットは「情報の縄張り」を数字は相づちの位置を示している。

⑼聞き手情報（B、C）

B－0.82　あなたはテレビ批評なども執筆なさっておられまして。［はい］(EX 2)

C－1.48　えーっと『嵐を呼ぶ男』ですか最初は。［そうですねえ］　（徹子）

もしこのとき、聞き手が相づちを遅い目に、たとえばポーズ部にかなりずれ込むような形で用いたら、自分の領域にある情報をあえて遠ざけるような印象を相手に与えるため、やや不自然になるか、別の語用論的な意味が生じるであろう。

一方、命題が「非聞き手情報 (A、D)」であった場合、その情報は聞き手にとって〈遠〉の情報であるから、聞き手の相づちは＋位置から始まるのが自然であろう。特にA情報は、話し手が自分の占有している情報を話す場合であるから、聞き手がうつ相づちの位置はかなり後方にずれ込むと予想される。次の例はその典型である。

⑽非聞き手情報（A、D）

A＋0.02　私は絶対に東京で仕事をしたいとは思わないんです。［ほう］(EX)

D－0.03　（あそこにいる助手さんなんかわりとビール瓶でガーンと殴られるとか）そういうことあると思うけど。［はーん］　（対論）

したがってもしこのとき、聞き手が相づちを早い目に、相手の発話部に完全に重なるような形で用いたら、自分の領域にない情報に干渉するような印象を相手に与えるため、やや不自然になるか、別の語用論的な意味が生じる。

以上の予想をまとめると、仮に引数に「情報の縄張り」A、B、C、Dをとり相づちの位置を返してくる関数“L (x)”を仮定すると、各々の相づちの位置は次の序列を示すと考えられる。L (C) <L (B) <L (D) <L (A)

上の予想が資料に網羅的に反映されているかどうかであるが、発話を「情報の縄張り」A、B、C、Dに分類し、各々に含まれる相づちの位置の平均をとると表3のようになった。

表3　情報の縄張りと相づちの位置

	C情報(N＝27)	B情報(N＝37)	D情報(N＝14)	A情報(N＝52)
I	−0.56	−0.39	+0.31	+0.11
II	−0.56	−0.41	+0.31	+0.19
III	−0.77	−0.44	+0.14	+0.17

Iはすべての相づちを、IIは笑いを除外したものを、IIIは笑いと話者転換を除外したものを分析の対象とした。全体的にみて、L (C)＜L (B) の序列は明確に現れているので、「聞き手情報」に対する聞き手の反応はかなり確定しているように思われる。一方、III以外はAとDの位置関係が逆転していることから、「非聞き手情報」に対する聞き手の反応は　L (A)＜L (D) となる可能性もある。しかし私はIIIが最も厳密な相づちの姿を表していると考えるので、現時点ではL (D)＜L (A) という序列を支持したい。また「情報の縄張り」ごとに相づち位置を点グラフで示すと図4、図5、図6、図7のような分布を示す。

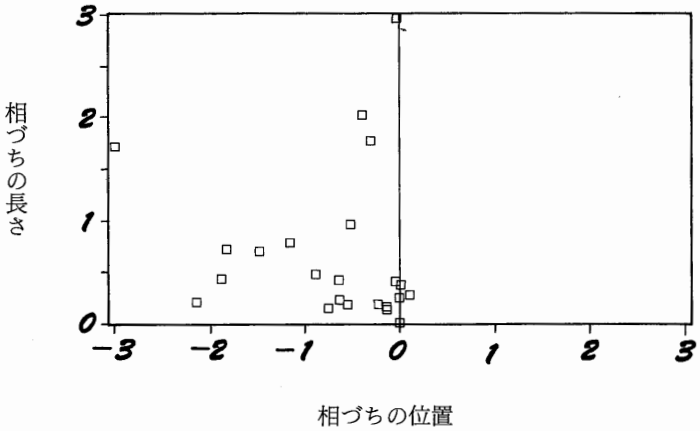

図4　情報の縄張りと相づちの位置
C情報

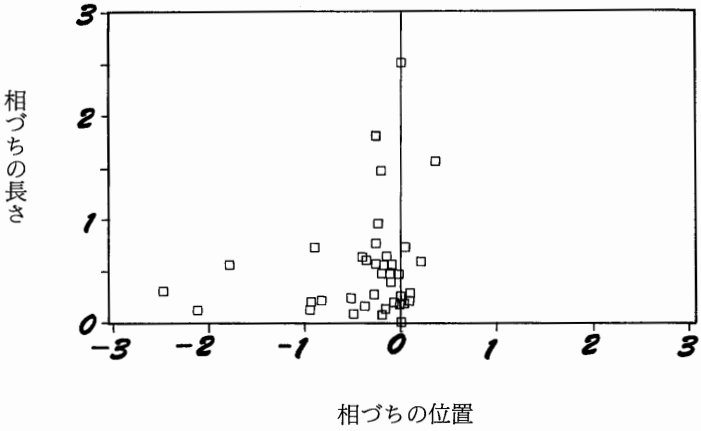

図 5　情報の縄張りと相づちの位置
B情報

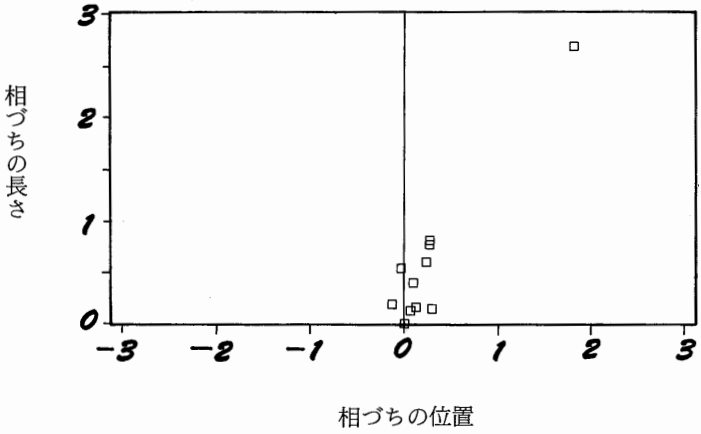

図 6　情報の縄張りと相づちの位置
D情報

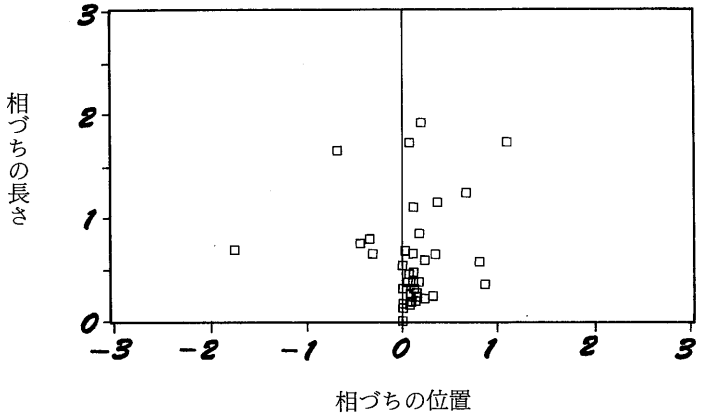

図7　情報の縄張りと相づちの位置
A情報

私の仮説を忠実に反映しているとまでは言えないが、少なくとも巨視的には相づちの位置が「情報の縄張り」によって統率されていることが見て取れるように思う。

5．情報の縄張りと発話速度

以上、私は「情報の縄張り」という認知論的な視点が聞き手の言語行動を分析する際に必要であることを述べた。またこうした「情報の縄張り」は、当然のことながら聞き手だけでなく話し手の言語行動にも影響を与える。私はこの際もキーになるのは話し手が提示する情報が「聞き手情報」であるか否かであると考える。すなわち、話し手は自分が提示する情報が「聞き手情報」であるか否かによって発話速度を変化させていると考える。

もし話し手の提示する命題が「聞き手情報（B、C）」であれば、話し手は聞き手への配慮からそれをゆっくり発話するであろう。特にC情報は完全に聞き手が占有している情報を話す場合であり、話し手は相手への配慮からこれをよりゆっくり発話するであろう。一方、もし話し手が提示する命題が「非聞き手情報（A、D）」であれば、話し手はそれを速く発話するのが自然であろう。特にA情報は、完全に自分の占有している情報を話す場合であり、話し手は聞き手に配慮する必要がないためより速く発話するであろう。また、話し手がこれらの規則に反するような速度で発話を行ったら、やや不自然になるか、別の語用論的な意味が生じるであろう。

以上の予想をまとめると、仮に引数に「情報の縄張り」A、B、C、Dをとり、話し手の発話速度を返してくる関数“S（x）”を仮定すると、各々の発話速度は次の序列を示すと考えられる。S（C）<S（B）<S（D）<S（A）

以上の予想が私の資料に網羅的に反映されているかどうか、「情報の縄張り」A、B、C、D各々の発話における発話速度、末尾速度の平均を調べると表4のようになった。な

お、発話速度＝拍数／発話時間、末尾速度＝２／末尾２拍の発話時間として計算した。

表４　情報の縄張りと発話速度

情報の縄張り	発話速度（末尾速度）
C情報	8.47（ 8.41）
B情報	10.34（10.09）
D情報	11.73（ 7.63）
A情報	10.48（ 9.87）

私の予想とかならずしも一致しないが、ある傾向は見て取れるように思う。

６．結　　語

本稿は２節で「情報の縄張り」という認知的な観点が聞き手の言語行動を分析する際に重要であることを述べ、３、４節では「情報の縄張り」と聞き手の言語行動（相づち）の関連を、また５節では「情報の縄張り」と話し手の言語行動（発話速度）の関連をそれぞれ具体的な数値で示した。

本稿で述べたように、対話の参加者は暗黙のうちに「情報の縄張り」に配慮した言語行動をとっている。そして、この「理想的な対話の型」からの意図的な逸脱は別の語用論的意味を伴うというペナルティが課せられる。上の主張は、Grice (1967) の会話の公準（Conversational Postulates）に照らしても支持されうるものであると考えるが、実際に相づちの位置を時間的にずらしたような対話音声を編集して被験者に聞かせてみる事でも証明が可能になろう。現在私はその作業にかかっている。

[付記]本稿は平成２年度の筑波大学院修士課程地域研究研究科の授業「日本語構造論(2)」における学年末レポートを圧縮したものである。

[注]本稿で使用した例文は以下のテレビ番組から録音したものである。
１．EX：『EXTV』　日本テレビ　1990年10月４日
２．EX２：『EXTV』　日本テレビ　1990年11月13日
２．NEWS：『NEWS23』　TBS　1990年11月７日
３．徹子：『徹子の部屋』　テレビ朝日　1990年11月29日
４．対論：『徹底対論』　フジテレビ　1989年７月
５．パペポ：『パペポテレビ』　日本テレビ　1990年9月24日

参考文献

Brown, P. and Levinson, S. C. 1978 Politeness, Cambridge University Press.
Grice, H. P. 1967 "Logic and Conversation" in P. Cole and J. L. Morgan (eds.)
1975. Syntax and Semantics 3：Speech Acts, Academic Press.
掘口純子（1988）「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」　『日本語教育』64号
今川博、桐谷滋（1989）「DSPを用いたピッチ、フォルマント実時間抽出とその発音訓練への応用」　電

子情報通信学会技術報告
神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論』　大修館書店
国立国語研究所（1960）『話しことばの文型(1)』　秀英出版
Labov, W. and Fanshel, D. 1977. Therapeutic Discourse, Academic Press.
メイナード・K・泉子（1987）「日米会話におけるあいづち表現」　『言語』第16巻12号11月号
水谷信子（1983）「あいづちと応答」『話しことばの表現』　水谷修編　筑摩書房
森山卓朗（1989）「コミュニケーションにおける聞き手の情報」『日本語のモダリティ』くろしお出版
杉藤美代子（1987）「ポーズとイントネーション」『談話行動の諸相』　三省堂

（筑波大学大学院　地域研究研究科　日本語教師養成プログラム）